

この作は近松の作品中に於ては、形式的方面から見ても最も整つた作であるのみならず、我が國戯曲史上に於ても最も傑出したものである。この一篇を以てしても近松の藝術的生命は不朽であると謂つてもよいと思ふ程である。

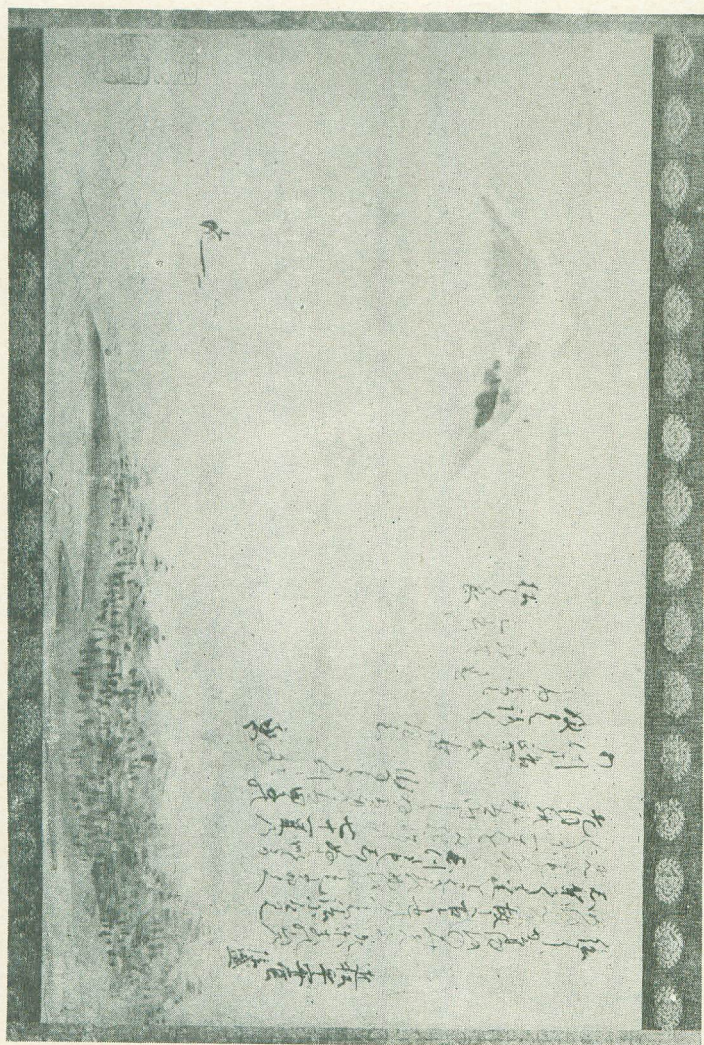
五 近松戯曲の内容

——主として構想の分析的研究——

近松の戯曲の題材・形式等については既にその大要を述べたが、これから進んでその内容について研究して見ようと思ふ。尤も内容といつたところで、その内容を構成すべき要素の一部たるべき作の世界・人物・乃至詩材及びその詩材が如何に劇化されたか等の問題については既に略述して置いたのであるから、茲では主としてその構想的の方面とその劇化手段として用ゐられた趣向とについて研究して見ることにする。

いふ迄もなく江戸時代は今日に比較して見れば階級制度の嚴守された時代であつた。

武士と町人　而してその階級中に於て、當代社會の中心勢力となつて、文化發展上に直接重要な關係を有つてゐたものは武士階級と町人階級とであつた。そして武士階級が貴族的・特權



近松門左衛門筆・富士畫賛

大阪・上神田鶴刀自藏

的であるに對して、町人階級は民衆的・自治的であり、彼が知識階級であるに對して之は無智階級であり、彼が名目を重んじるに對して之は實質を尊んで居た。而して當時武士階級が守らねばならぬ侍道德即ち武士道なるものは、彼等の祖先が戰國亂離の世に於て優勝者となるべき第一條件たる團結の力を構成すべき必要上から、自然に發達して多年の訓練を経て作り上げられたものであつた。然るに彼等はそれを太平無事の世に於ても、尙墨守しなければならぬといふ窮屈な、不自然な境遇に置かれてゐた。之に對して町人は、當時の實際生活上に於て、最も必要な金力を掌握しつつも、形式上、武士階級に屈從せねばならぬといふ状態にあつた。

名實の衝突 即ち名實の衝突といふのが當代の世相であつた。而も一世紀に亙つた太平の結果として生れた元祿時代といふ花やかな現實謳歌の成金時代（それは都市文明の上から見れば、政治的・思想的の革命が行はれて居なかつた結果として、太平の恩澤を社會に均霑せしむるよりも太平成金時代の餘殃の方が多くて、金の世界であり、遊里の榮えた時代で、色と酒との世であり、若々しい熱情の湍つて居た時であつた。かかる時代に於て、一面名目と因習とに囚へられて、その桎梏を切り破る事の出来なかつた武家や町人は、この時代の空氣を呼吸する以上は、また他の一面に於てその時代の生きた力に左右されざるを得なかつた。そしてその結果は奔放

な時代の潮流に逆ふ爲に、又は流される爲に――それは有意識の場合もあるが、兎に角いづれも大いなる犠牲を拂はねばならなかつた。

武家のお家騒動や武士の墮落、又は町人社會の情死は即ちその犠牲の顯著なるものであつた。

近松は時代の描破者 元祿時代が生んだ大文豪近松の劇詩は、實に如上の社會の破綻・缺陷を遺憾なく描破したものであつた。併し乍ら彼は例の虚實皮膜の藝術觀の上に立つた作者だけであつて、浮世草子に見る如く、その作品は常に時世の寫實に止まらずして、これを美化し淨化し、藝術化すると共に、如何にしてその缺陷を補ひ、その破綻を救ふべきかに關して、彼の理想をも暗示して居る。これが爲に武士階級に對しては、侍道德即ち武士道的精神を高調し、町人社會には町人道德即ち信用・勤儉・致富の必要を説くと共に、時代の犠牲となつたあはれむべき人物に對しては、因襲と義理との世界を超越した來世に戀愛至上の境地を設けてやつた。これが實に、博大なる愛に徹した、常識圓滿なる文豪近松の時代物と世話物との内容の基調となつて居るのである。即ち彼は理想を抱いてゐた詩人であつた。

更に一步を進めて見るに、近松の時代物は、その世界に即していへば、上は神代から、降つては桃山時代に至るまでの顯著な史譚・説話・巷説は殆んどすべてその詩材となつて居る。加

之、世界は吉野朝または四天王時代でありながら、その中へ徳川時代の顯著な出來事をさへ仕組んだものもある。扱この時代物の中で所謂大時代物、即ち王代物には叛逆事件を取扱つた作が非常に多い。之に對して武家時代を世界としたものは、見方によつてはその大部分はお家騷動ものとも見られるが、これは注意すべき點である。

王代物の叛逆事件と、武家時代物のお家騷動とは要するに時代による名目の相違に過ぎずして、その本質は特權階級跋扈に伴ふ下剋上の現象で、何とかして實權・實力を握り度いといふ野望の發現で、つまり當代に生き甲斐ある生活をしたゐる爲に起るところの階級破壊・因習打破の爲の悶えを過去の説話に假託して描寫したもので、これが近松の時代物を貫く一大主想である。元祿時代を背景とする近松の時代物中の叛逆物・お家騷動物の内容は、之を世相を透して解釋すれば斯の如く見る事も出来ると思ふ。

而してこの叛逆物やお家騷動物はその惡逆無道・奸譎詐謀・奸惡狡智の人物の活動に對して、必ず、忠臣・義士・節婦の献身的犠牲乃至は壯烈鬼神を泣かしむる體の活動を配し、その爲に事件は波瀾葛藤を経て必ず光明的の解決を得ることになつてゐる。それ故に、叛逆物やお家騷動もの即ち多くの時代物は、見方によつては忠臣・義士・節婦の活動を示す場面を描く爲の方

便として使用されたやうな観がある。更に語を切にしていへば、近松の時代物は武士階級の道徳、即ち犠牲・献身・勇武・服従・廉潔等を内容とする武士道の發現を描いて、ここに名實の衝突に基く悲劇を構成したものが多い。而してそれが爲に時代物のそれぞれの作の全篇の山となる點、即ち第三段目乃至第四段目に於て、又は一段中の頂點をなす可き點に、如上の想の體現を試みんとして種々の趣向をこらして居るのである。先づその顯著なるものとして第一に擧ぐべきは身代りである。

身代り この身代りといふことは、實に我が邦の淨瑠璃戯曲の時代物を通じて一大系統をなすもので、武士道の精神の至上の發現を示し、併せて國民性の一特色を表してゐると言ひ得るが、近松によつて殆んど完全に戯曲として作り上げられてゐる。今これについて少し詳細な史的考察を試みようと思ふ。

抑も身代りは献身的・犠牲的精神の發現に伴ふ人生に於ける最も崇高なる悲劇的現象であるが、之を我が邦戯曲に仕組まれたものについて見るに、その動機としては、(一)宗教的、(二)戀愛的、(三)倫理的の三種に大別し得るかと思ふ。

佛の身代り

第一の宗教的動機による身代りといふのは、佛菩薩がその宏大無邊の慈悲を垂

れて、信心深い者の危急に代つて之を助けるといふのが原型で、即ち佛菩薩の身代りである。

所謂靈驗譚・縁起物にはこの種の説話は甚だ多いのであるが、これが戯曲として脚色されたものとしては『阿彌陀胸割』が最も古くして、また最も代表的のものであらう。本曲は既に淨瑠璃の創始時代に行はれたものであるが、親の罪障滅却の爲に我が生膽を主人の若君に飲ませてその難病を平癒させようとする信心深い少女を憐んで、阿彌陀佛がその身代りに立つといふのが主想であつて、完全なる佛の身代り物である（この『阿彌陀胸割』の外題替に『阿彌陀身代り』といふがある）。これは説經系の古淨瑠璃中の靈驗物の一代表作であるが、元祿期に至つては殆んどその跡を絶つた。自然、近松の作中にもこの型の身代り物は極めて少ない。強ひて挙げれば『出世景清』の第五段にその型を見せて居る。即ち清水觀音の熱烈なる信者で、十七の春から卅七歳まで毎日卅三卷の普門品讀誦を怠らなかつた景清が、頼朝の命によつて佐々木四郎の爲に首を刎ねられて、三條畷の獄門にかけられたところが、その首は實は清水觀音が身代りに立つたのであつて、この奇瑞に感じた頼朝は景清を赦すといふ仕組になつて居る。これと類型なのは『盛久』（主馬判官盛久）の第五段で、之も盛久の守本尊たる千手觀音が重衡の身代りに立つ事になつてゐる。この原據は謠曲の『盛久』である。もう一つ近松の作でこれと似寄つた趣向

のものを擧げると、『善光寺御堂供養』の第四段目の切で、阿彌陀如來が、信心深い本田善光の子善光の志を憐んで、地獄の苛責を受け、善光を娑婆へ歸すといふ筋が即ち之である。序に言つて置き度いのは『京わらんべ』である。これは宇治加賀掾の正本で、天和・貞享頃の作らしい。作者は近松かともいはれるが、これが矢張りこの系統に入るべきものである。この作は『曾我物語』の卷七の三井寺智興大師の事、泣不動の事として名高い話であるが、之が謡曲に作られて『泣不動』となつてゐる。之を主材として更に謡曲『三井寺』を取合せて脚色したものであるが、その第四段目は、即ち恩師智興の身代りにならうとする證空の心事をあはれんで、不動がそれに代るといふ筋である。これは『今昔物語集』の十九卷九の硯破の話などから系統を引く〔撰集抄〕にもある。三井寺泣不動の説話の劇化で、矢張りこの系統の身代り物である。いづれも中世紀の佛教臭味の多い説經風の系統に屬するもの、又は謡曲趣味のものであるだけに、近松の作としても割合初期の古浄瑠璃の系統を引いたものに二三散見するだけである。神佛の靈驗奇瑞を取扱つた作は、近松時代及びその後にも少からずあるが、佛の身代りを主題とした作は殆んどない。これは時代の好尚の結果勿論さもあるべきことで、古浄瑠璃と元祿以後の浄瑠璃との差の重要な要件の一は即ちここにあるのである。

戀愛的動機の身代り 第二の戀愛的動機による身代りといふのは、女がその愛する男の爲に身

を殺してその男を助けるといふので、之も亦古く日本の文學にその型が表れて居る。例へば

『今昔物語集』の近衛中將が乞食娘に代られて強賊の毒鋒を遁れた話（卷二十九第二十八）や、長安

の女が枕の位置を反對に置いて夫に代つて敵の爲に殺された話（卷十第二十一）などがさうであ

つて、例の袈裟御前の身代り説話（『源平盛衰記』十九卷、文覺發心附東婦節女の事）は、即ち後者の系統

を引くものである。近松がこの材料を取扱つたのは『戀塚物語』（延寶頃の作
加賀掾正本）及びその改作たる

『一心五戒魂』（元祿十一年刊
義太夫正本）である。而して後世の袈裟御前・文覺を主人公とする悲劇は大抵

ここから流れ出たのである。また前者の説話の系統を引くものとしては古淨瑠璃『牛王の姫』

（慶長、寛永頃行はる、寛文
十三年の八文字屋版あり）があり、清水理太夫の正本『神武天皇』（延寶五年刊）の中のやすらひ姫

が彦照親王を助ける條がこれと類型で更に技巧的となつたものであるが、近松の作にはこの型

のものは見當らない。次に頗る技巧的なのは『薩摩守忠度』の第三段目である。これは竹本

義太夫の正本で、元祿十年頃迄の作かと思はれるが、加賀掾の正本では同じ物が、『千載集』

（『一谷嫩軍記』の原據）と呼ばれて居る。内容上『主馬判官盛久』の姉妹篇であつて、第三段目

忠度討死の場が全篇の山となつてゐる。その場の荒筋をいへば、一の谷の合戦の場で岡部の六

彌太は、京都で忠度を見遁した時の契約に基づいて、この場でその首を取らうと待構へて居ると、二人の女が相前後して忠度に扮して現れて首を授けようとする。前なるは忠度の情人定家の女菊の前、後なるは忠度の情に感じた海士三日月『千載集』は時雨となつてゐる）である。最後に本物の忠度が現れ、三つ巴となつて六彌太を困らせる、ここへ稻毛入道が寄せて来る、三日月は忠度と名乗つて討たれる、忠澄も止むを得ず忠度を討ち、双方名乗りを揚げる。これが兩人高名争ひの伏線となり、六彌太は稻毛入道の奸策にかかつて苦しみ、幾多の波瀾を起すのである。随分不自然なものであるが、かういふ趣向が却つて後の出雲や宗輔等の如き技巧派の作品の先驅をなしたのである。

斯の如く年若い女が、その戀人の身代りに立つて死ぬといふ精神は、戀愛としては最も悲壯な結末であるが、併しこれは極めて特殊な場合に限つたことに止まる。否寧ろ理想に止まるものと思はれる程、我々の實生活とは縁遠い感がする。併し戀愛の爲にその戀人に對して犠牲的行爲をしようといふ動機に基づくいろいろの葛藤はいくとも想像し得ることであり、また實生活に於て決して稀有な事でない。

實地にありさうな例を近松の作から三つ拾つて見よう。自分に馴染を重ねた爲に身の破滅を

招いた勝次郎の爲に、木辻に二度の身賣をしたのみか、彼の急を救ふ爲に人殺しさへするといふ『淀鯉出世瀧徳』の吾妻や、之も夫の身を公儀の搜索の手の届かない地へ遁れさせる路用金を得る爲に、三軒屋に身を賣る『傾城吉岡染』の吉岡などの如き、即ちそれで、之は前の袈裟御前や菊の前を世話に碎けた行き方で、その根本動機は同じで、只その境遇によつて違つた行爲となつて現れたと見れば見られる。加之、『重井筒』のお辰や、『心中天の網島』のおさんのやうに、我身を粉に碎いても、夫の爲に顔を立ててやらうとする貞實な女房なども、前の女性等と一脈共通點を有する犠牲的行爲をなす人物である。尤もこれは單に戀愛だけの動機からではなく、之に貞操の觀念も伴つてゐる。近松の作には此の型の女が少くない。殊に圓熟時代の作に之を見ることが多い。恐らくは之が即ち翁の理想の女性であつたのであらう。

倫理的の身代り 第三に倫理的動機に基づく身代りといふのは、家來が主君の身代りに立つのであつて、これが實に戯曲に於て取扱はれた武士道的精神表現の極致を示すものであつて、普通の身代りといへば、之を指すのである。

抑も家來が主君の危急に代へて命を捨てるといふことは、戦記物などにも見えることで、例へば漢の高祖に代る紀信、義經に代る嗣信・忠信兄弟、大塔宮に代る村上彦四郎などその例で

ある。近松の作でも『門出八島』、『吉野忠信』などでは之を取扱つてゐる。併し普通劇に用ゐられた身代りは、より複雑な形式のものであつた。色々の動機によつて、どうしても死を免れ得ない境遇に陥つた若殿や姫君を助けんが爲に忠臣が身代りを立てる。而して身代りに立つ本人は、自然、若い男女、また時としては幼少の者で、之を斬るのはその親や兄が多い。故にここに忠義の一念と骨肉の愛との葛藤に基づく大苦悶が當然醸される。又その忠死を悲しむ母や姉などの愁歎が起る。その心狀や場面を描くのが即ち身代りの普通の型である。

而して劇として此の型の身代りの濫觴をなすものは、恐らくは謡曲の『満仲』（仲光）であらう。この作は多田満仲の一子美女御前が學問修業の爲中山寺にやられて居りながら、學事を顧ずに武事にのみ熱中して居たのを父満仲が憤つて、家臣仲光に命じて殺させる。仲光は主命であるが之に忍びず、遂に我子幸壽を殺して美女御前を助けるといふ筋で、簡單ではあるが身代りの典型である。下つて淨瑠璃では上總少掾正信の『公平法問諍』（寛文三年九月刊）がこの流れを汲んだ最初の作で、それが改作されたのが即ち有名な『忠臣身替物語』といふ事になる。尤も『公平法問諍』は『満仲』の系統は引くものの、實は翻案といふ方が適當であつて、この作では公平が蠻勇を振つて満容上人を脅迫し、加茂次郎義宗（謡曲の美女に當る）の出家を阻止する條が

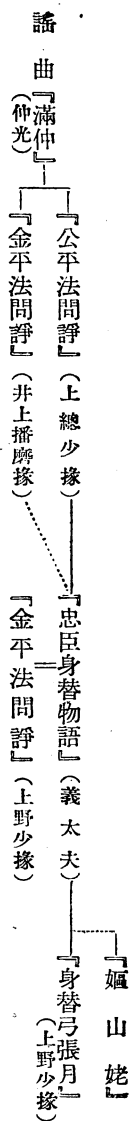
眼目で、身代りの筋は挿話風に取扱はれて居る。この作は江戸の和泉太夫の、『金平法問論』
(聲曲類集)の系統を引く京の金平派の代表者上總少掾の正本であるから、金平の活動を主として居るのは止むを得ないが、身代り物としては寧ろ原作の謠曲に遠く及ばない。



忠臣身替物語挿畫

忠臣身替物語 ところが『法門諍』の改作たる『忠臣身替物語』はその題名の示す如く身替を主想に立てて、よく原作の想を傳へ、更に一層巧妙に劇化して居る。その作者は近松門左衛門で、元祿二年八月の刊行である。『今様柏木』はその外題替である。但し加賀掾の正本にも同外題のものがあるが、恐らくは義太夫の方が先であらう。この作では、加茂次郎義綱が出家を拒む理由は、原作に見るやうに武を好むといふだけでなく、母の侍女柏の前といふ美人と契つて居るのが隠れた動機になつてゐる。それで柏の前は夜更けて公平の許を訪うて事情を打明けて頼む、公平は「いやはや今時の子供に油斷はならぬ」と笑

ひながら、義綱の出家を阻止することを快諾して義綱をかくまふ、頼義は怒つて八幡太郎に命じて公平・義綱を討たせる、討手の侍大將和田左衛門爲宗が一子竹若丸を義綱の身代りに立てる。爲宗が竹若丸を斬る時の苦惱、及びその後でその母が我が子の末期の模様を聞いて悲歎にくれる場面が全篇の山で、これが三段目の切となつてゐる。全體の作柄は決して佳作とはいへぬが、この三段目は近世戯曲の身代り物としては最も原型的の作で、また最も無理が少く、すらすらと運んで居る作である。この作が身代り物としては前を承けて後を開く位置に立つが、この趣向を一段と複雑にしたのが『姫山姥』の三段目の冠者丸頼光の爲の身代りの場である。又同じく『身替物語』の系統を引く淨瑠璃としては、豊竹上野少掾に『金平法問淨』(年代未詳 享保初年)がある。これは近松の作の外題替に過ぎない。また享保十年、西澤一風・田中千柳合作の上野少掾正本に『身替弓張月』がある。「美丈御前幸壽丸」と角書があるのでも知れる通り、人物の名稱は謡曲の原作を用ゐて居るが、近松の『身替物語』の翻案で、美丈の殺される動機を、逆臣田原千晴の女と結婚を強要される點に求め、徒に筋を複雑にし、挿話を多くし、結構が支離滅裂の惡作である。今『仲光』の系統を表示すれば次の如くである。

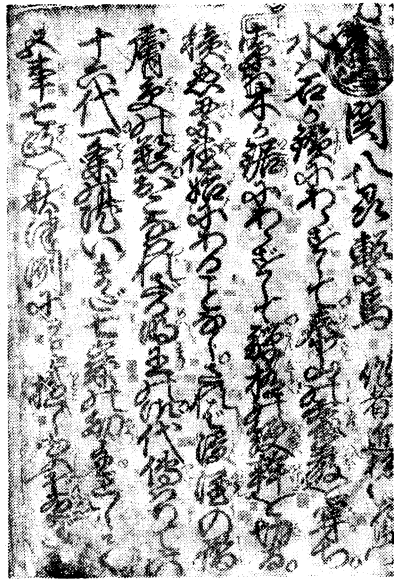


ところで近松の作で身代りを取扱つたのは、前の『忠臣身替物語』が最初かといふに決してさうではなく、既に之より九年前の天和元年正月の作『東山殿子日遊』(加賀掾正本)にこれがある。この第三段目が即ちさうで、仁木入道は自分の惡事露顯を虞れて、畠山持國の許に預けられて居る足利義政の女八雲の前を、上意と偽つて討てと言ひ送る。姫は父に強ひられた結婚を肯んじないので、父の憤を買つてゐる身であるが、持國は「討てとあるも主命、討ち奉らんも主君なり、あはれ世の中にせまじきものは宮仕へ」といつて途方にくれて歎く、持國の獨娘の初霜が父の心事を察し、自ら進んで姫の身代りに立つ、持國は涙ながらに娘の首を討つて、その面に血を塗つて仁木入道に示すといふ筋で、持國父子の心情が相應によく描かれて居る。『身替物語』の爲宗が竹若を討つ場面は、之と同趣向で文の筆致まで頗る似て居る。序にいふが、江戸の歌舞伎劇の『關東小六』(元祿十一年中村座上場)の第三番目で、彌五郎が一子市若を主君關東小六の若君清若の身代りに殺す場面があつて、歌舞伎劇の身代り物としては嚆矢かと思ふが、件の近松の

作に負ふところがあるかも知れない。

尙近松の作中身代りの趣向で注意すべきは『用明天皇職人鑑』(寶永二年(五十三歳))の第二段目及び近松最後の作『關八州繫馬』の第三段目である。『用明天皇職人鑑』は近松の作品、就中時代物の脚色上に於て一轉期を劃する時代の代表的作品で、非常に技巧的となつて居るが、ここに問題となつて居る身代りの趣向の如きもさうである。佐渡の郷侍松浦庄司の母が、その娘佐用姫がその情人五位之介から兄を討たなければ縁を切るといはれ、「兄たる人の首討つて戀を叶へしめしなし」と苦悶するを立聞いて之を勵し、手引して兄庄司を討たせてやらうと、實は自分が兄に代つて姫の槍先にかかる趣向で、近松としてはこれ迄にない技巧的のものであるが、この段を一讀すると直に後世の『鎌倉三代記』(安永十年三月江戸肥前座)の時姫の條や、『太功記』十段目の尼ヶ崎の光秀の老母を聯想させるやうな脚色である。

『關八州繫馬』は近松の作中の最長篇で、また最も複雑な脚色の作であるといはれるが、その中でもこの三段目の身代りの悲劇は最も波瀾重疊を極めて居る。賴光が謀叛人良門に一味した末弟賴平の首を討てとその預り人たる乳母子箕田次郎に嚴命を下す大筋は、『忠臣身替物語』の系統を引くものと見てよいが、ここへ賴平の情人詠歌姫の母が來て、家名再興の爲に自ら手引



丁初「馬 繁 州 八 關」

して頼平を討たせろと強要するので、姫は男裝して夫に代らうとしてその用意をする處には袈裟の身代りの翻案を利かせ、最後に箕田次郎が姫と頼平とに代つて忠死するといふ複雑な仕組になつて居る。

もう一つ技巧的な身代りとして、近松の條下に於て我々は『大塔宮囃鎧』(享保八年上

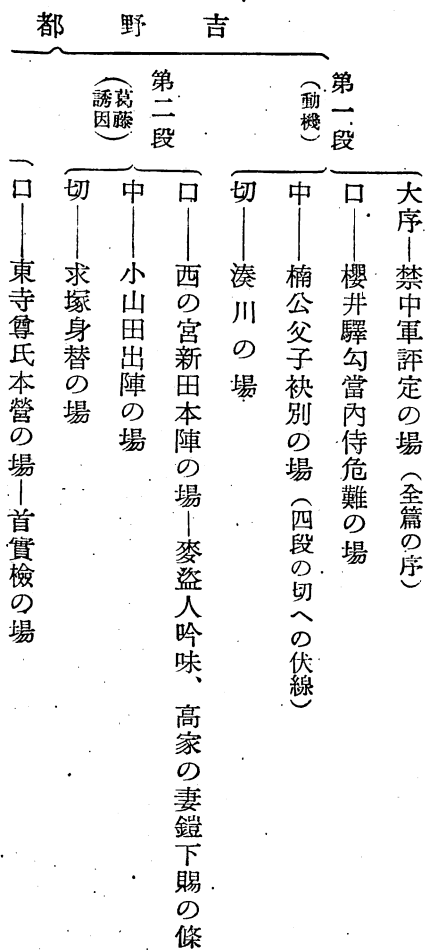
『太平記』)の第三段目身替音頭を擧げて置き度

い。この淨瑠璃は竹田出雲と松田和吉とが作者となつて居るが、近松門左衛門添削と明記してあるのでも知れる如く、その大切な箇所は相應に近松の手が這入つて居るに相違なく、殊に全篇の山である三段目の切は、之を近松の作として取扱つても差支なく、また見方によつては、近松から出雲・文耕堂等の純技巧派へのかけ橋をなす作としても取扱へる。近松の晩年の作によく見える古武士の典型的なる義烈一徹の權化ともいふべき齋藤太郎左衛門が、無心に盆踊りを踊つてめぐり來る踊子を鐙元をくつろげて熊鷹眼で見詰めてゐる。大塔宮の若宮の身代りに

立たせる手筈になつてゐる永井宣明の一子鶴千代を斬るかと思ふと、その次の三人目の子の首を水もたまらず斬落して「我が孫の力若丸」と泣く趣向は、身代り物としては技巧の極致であり、人形劇の縹渺夢幻の特質をいみじくも利用した作柄である。

その後の作品に身代りの趣向はいくらもあるが、就中『大内裏大友眞鳥』(享保十年、出雲)の第三段目、百姓助八兼道の身代り、『三莊太夫五人嬢』(享保十二、出雲)の三段目、焼鐵の段(三莊太夫の女およつ〔美女、啞〕を安壽姫の身代りに立てる。長女白痴、二女ちんば、三女天死、四女啞、五女眼病)、『須磨都源平躑躅』(享保十五年竹本座、文耕堂・長谷川千四)の第二段目切の「扇屋熊谷」、『御所櫻堀川夜討』(元文二年、竹本座、文耕堂・三好松洛)第三段目切・辨慶上使の段、『菅原傳授手習鑑』(延享三年、竹本座、出雲・並木千柳・三好松洛・竹田小出雲)の第四段目切・寺子屋の段の如きいづれも身代りとしては著名なもので、今もなほ舞臺上に生命を保つて居るが、要するに近松の身代りの趣向を一層技巧的にしたまでであつて、新機軸を出して居るとはいへない。また『手習鑑』の翌年の作で、同一連名の作者の手に成つた『義經千本櫻』の三の切・熊屋の場の如きも、寺子屋の焼直して、之を一層世話に碎いて、女房子供までを生きたまは身代りに引かせるといふ御馳走を加へたものであるが、身代りとしては却つて中心思想が稀薄になつて居る。

身代りの趣向はその典型的のものに於ては首實驗の場が伴ひ、これが武士の苦衷の見せ場所として頗る劇的效果を示すのであるが、この名高い例は、次期に完成される寺子屋であるが、この趣向も亦當代にその源泉を發して居る。而して今その代表作の『吉野都女楠』を擧げて説明しよう。この作は正徳元年、近松五十一歳頃の筆で、作全體としては決して時代物としても傑作ではないが、身代り首實驗の場面だけとしては説明上最もよい例であると思ふから少し委しく述べる。それに先立つて全篇の結構を表示すれば左の如くである。



女

第三段

(頂點)

中——内侍狂女の場——一條大路梟首の場(夢幻的の場面)
切——前司切腹の場——同上

桶

第四段

(轉向)

口——坊門清忠邸——名和長年(酒賣)、小山田高家の妻——歌比丘尼(丸太)
後醍醐天皇を迎へ奉る條
切——天神森の場——正行奇計

第五段

(結)

三輪神前の場

この作は第三段の口の首實檢の場から、切の小山田前司切腹の場が全篇の主眼となつてゐるが、この場を引出す爲に第二段の切に求塚身代りの場がある。敵の大將と狙ふ新田義貞から不思議の縁で甲冑を貰つて、それを着て出陣した小山田高家は、求塚の一騎打に義貞の手にかからうと思つたがそれが叶はぬので、自ら義貞と名乗つて大森彦七に首を授けるのである。この場面は『太平記』によつたことは勿論であるが、前の『薩摩守忠度』の海士三日月が忠度の義に感じて身代りに立つといふ趣向の翻案で、後の歌舞伎劇の、『求塚身替新田』(明治廿五年、歌舞作^{士改})の原作をなすものである。尤もこの場合に高家が身代りの壯舉に出る動機は、二段になつて展開されて居る。即ち始め妻の持つて來た鎧が義貞の着古しなるを知つて、武士は廢つたと

運命を呪つて絶望的となる。併し「一度着して見せずんば、其方を騙すなどさみせられんは男の恥」と、この時義貞の手にかかつて自分は死んで、義貞と妻との顔を立てようとして出陣する。併しいよいよ義貞に組敷かれて、ここに義貞の仁心が心に浸みて茫然と立つて居るところへ、大森が押寄せて義貞の身邊が危険になつたのを見て身代りに立つといふので、全く武士の感激の一念から身代りに立つといふ想になつて居て、普通の主従の身代りから更に一步を出てゐる。さてこの場の跡を受けて、三段目の口、京都東寺の尊氏の本營の場に於て、日頃臆病者といはれる大森彦七が、敵の大將新田義貞の首を打取つたといつて、錦の直垂の袖に包んだ首を實檢に供へる。尊氏は前後の事情から判斷して不審に思ひ、義貞を見知つて居るといふ小山田前司に判定させる、小山田はそれが十八年前に武士の義理合上止むを得ず勘當したが、一時も忘れる事の出来なかつた我が子の小山田太郎高家であるのを知つて、一旦は愕然として驚くが、それにしても敵將と名乗つて死ぬとは訝しい、何か事情があらうと思つて、大切の首級、老眼に見誤りがあつてはならぬから一條大路の獄門にかけて大勢の人に見させた上決定してはと上申し、且つ思ふところがあつてその番人には自分が進んで當るのである。この場面がやがて首實檢の場としても名高い『寺子屋』の粉本となつたのである。

寺子屋の松王が首桶を引寄せて實檢する條に、「眼力光らす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て」といふ名文句があるが、これは前司が首を實檢する様子を寫した「近々と立寄り右へ廻り左へ向き、ためつすがめつ見れば見る程、疑もなき我が子の高家」の翻案であり、また寺子屋の松王の臺詞の、「生顔と死顔は相好が變るなどと、身代りの贗首、それもたべぬ、古手な事して後悔すな」といふのは、大森彦七が「これ前司殿、生貌と死貌は相好の變るもの」といふ臺詞の踏襲に過ぎない。以てその兩者の關係を推測し得るではないか。尤もこの一場だけの劇的價值からいへば、勿論寺子屋の方が遙かに勝れて居る。何となれば、贗首を平氣で實檢に供へる大森に對して、自ら身代り首を討つて實檢にかけ、自分も九死一生の覺悟の源藏、また首を實檢して初めて我が子と知つて訝る前司と、初めから我が子と知りつつ熱鐵を呑む思を顔に示さずに實檢する松王とは、場面を構成する人物の境遇、心持が丸で違ふのみならず、後者には千代と戸浪といふ女性の活動もあるといふ次第で、彼に比して此はずと整つてゐるわけである。併し乍ら『吉野都女桶』に於ては、この首實檢の場は前の求塚身代りの場を受けて、後の一條大路獄門の場を呼び起す連鎖となつてゐる場面に過ぎないのであるから、この場だけを取出していふのは少し穩當でなく、三場面を通して考へなければならぬ。即ち、獄門の場に於

て、いよいよ高家が敵將の身代りに首を授けた事情がその妻によつて物語られるに及んで、高家は初めて我が子の立派な態度に感動すると共に、親としての述懐があり、ここに義理と人情との挾打に合つて彼は自刎するといふ悲壯な場面で終るのであつて、この三場を通して見ると近松の時代物としては、頗る整つた、相當に想の深い作となるのである。一面頑固一徹、義理の權化と見える老武士は、その内心には萬斛の慈愛の涙を湛へて居るので、この小山田前司型の人物は近松好みの古武士の典型で『相模入道』の安東入道、『身替音頭』の齋藤の如きさうである。而してこの型の人物は、やがて世話物の老人にもこれを見出す一つの共通的の近松型の老人である。

以上近松の武士道的理想の頂點を示すものとして、劇に仕組まれた身代りにつき實例を擧げて大體その扱方と内容を述べたが、以下少し之に對する私見を開陳しようと思ふ。既にいつた如く、身代りといふことは武士道精神としては實に忠烈なことに相違なく、また犠牲的精神としては極致を示すものであらう。併し「身を殺して仁をなす」とか、「大義親を滅す」とか、「死を見るに歸するが如し」、「命は鴻毛より軽く義は泰山より重し」といふやうな身代りの思想の根柢をなす言葉は、要するに概念上の理想的の格言で、これが實人生に現れる場合には人情が

からんでその兩者は相即不離の状態となつて、もつと複雑な、もつと不純な、もつと情的な現象となる。然るに近松の時代物を見ると、この種の思想中、最も人情忍び難しとする身代りに於ても、義理の一面だけが強烈に出て居て、人情は殆んど取扱はれて居らぬ。人情は絶對的に抑壓されて居る。その結果義理だけが抽象的に、また場合によると餘り安價に取扱はれてゐるやうに思はれることさへある。切つても切れぬ、泣いても泣き切れぬ、諦めるにも諦め切れぬ人情が纏綿すればする程、義理はその強さ、その尊さが現れて來るべき筈であると思ふ。が、その點は、切斷されて居る場合が多い。併し流石に近松もその點に全く無關心ではなかつたことは、身代りには必ず愁歎場を伴はせて居るのでも知れる。併し既に別に愁歎場を描くといふことで、義理と人情とを二元的に取扱つたものである。殊にまだ殆んど自覺もないやうな少年少女を身代りに立てるといふことは、全く想の爲に人間を平氣で殺すもので、何といつても無理であり、不自然であり、非人道であり、結局、人形を借りて武士道の理想を表現しようとした迄であると極言される根本的缺陷が横つて居るやうに思ふ。時代物が藝術的に失敗したといはれる根本的理由の一はここにあるといはざるを得ないであらう。

切腹（自害）

更に着眼點を新にして前の『女楠』に於ける小山田高家が義貞の身代りに立つ

動機や、又、その父前司が自刎する動機を分析して見れば、近松が如何に武士は義理と面目を重んじ、それに對しては命を輕視して居たかが、類推出來ると思ふ。昔の武士は面目維持のためには、場合によつては切腹もせねばならぬものとされて居た。これが即ち武士の武士たる所以であると思はれたが、近松はそれを尊しとした。而して前の身代りに立つといふ犠牲的精神と、この自害といふ武士道精神に基づく行爲とが、合致して表れたのが、即ち、いよいよ事件が困難となつた場合に、その板挟みとなつた中心人物が身を殺して事件を解決するといふ悲劇的の場面として時代物に於て描かれた一手段であつた。而してそれは單に男子のみならず女性さへもさうであるとして、ここに武家の女性の、義の爲に如何に雄々しきかを示すと共に、やがてそれを以て一般武家社會の義の爲に身を献げる壯烈さを示して居る。この最も技巧的な一例としては『國性爺合戦』の第三段目獅子が城の場を擧げ得ると思ふ。而してこれを世話物に適用したのが即ち『長町女腹切』の半七の叔母で、刀に纏綿する宿命の犠牲として、身を殺して三人の若い者を助けると言ふ悲壯な最期をとげる彼女は、武士の胤であるといふところに、作者が武家の女性に對する解釋が見えるのではないか。尙一つ顯著な例を擧げれば、それは『堀川波鼓』のお種である。亂醉の結果、殆んど無意識状態で犯した罪の爲に、一言の言譯も

せず自害した彼女は、いぢらしくも雄々しい女性であると思はせられる。序に武家の女性の雄雄しさを示したものを例示すれば、『碁盤太平記』の由良之助の母と妻とで、この二人は刺違へて我が子・我が孫を勵ますとは實に壯烈の極である。『國性爺』の紅流しの場面で、和藤内の母が、錦祥女の劍を取つて自害して、「韃靼王は面々が母の敵妻の敵」と勵ますのもこれと同工異曲で、更に一段と圓熟の技倆を示して居るが、是等はいづれも近松の理想の武士の妻であり、母であると思はれる。尤も藝術としてはここにも我々は前の身代りと同様の缺陷を指摘し得るのである。

更に進んで自害を最も劇的に有効に用ゐたのは、惡事の懺悔をして自害するといふ筋で、その代表的のものとして、私は『津國女夫池』(享保六年)の第三段目冷泉文治兵衛懺悔の場を挙げたい。併しこれに先立つて、『酒吞童子枕言葉』(寶永四年)の第三段目の廣文切腹の場と、『弘徽殿鵜羽産家』(正徳二年)の第三段伊賀介懺悔の場とについて先づ一言する必要がある。

『枕言葉』では、京北白河の廣文といふ浪士が栗田口の加藤兵衛の娘横笛を誘拐して、江州鏡山の宿の長の許へ遊女に賣つた罪惡が判明し、頼光に強要された結果、自分の娘を代りにして横笛を返さうと、加藤と同道で鏡の宿へ行つたが、横笛が折しも自害したので、廣文は贖罪の

爲自害するといふので、瘠せても枯れても武士らしい立派な末期を遂げて居る。之に對して『鵜羽産家』の方は、非常に複雑な筋であるが、要點は伊賀介久國は、左大將早岑（弘徽殿の叔父で惡人、謀叛を企つ）に教唆されて藤壺を刺し、その罪を源賴光の臣小餘綾新左衛門景春に轉嫁して、右大將の恩賞に預つて榮達し、その下女お竹を妻に引上げたがその竹は實は小餘綾の妻で、其處へ子供小文吾が尋ねて道々物語る。之を立聞いた伊賀介は二人の心情の美に打たれて、改悟の結果、二人の前で舊惡を全部懺悔して、自ら進んで自訴し、小餘綾親子三人を再會させるといふ仕組である。併し近松はこの二惡漢に對して、その惡事をなす動機として、前者は主君（常陸介安盛）の惡事を諫めた結果浪人となり、妻子を餓死させるに忍びずして犯した罪、これもその當時洛中に人攫ひの變化が流行するといふのを奇貨としての出來心の爲であり、後者は母の病氣の藥代を得度いばかりの望に目がくらんだ爲であつて、その動機には幾分恕すべき點もあり、また社會にも缺陷があつた爲であるとし、而も後にはいづれも人情の美に打たれ、一時曇つた理性と道義の念が目ざめて、立派に武士らしく自己の惡を改悔して自ら處決して居る。この點は頗る注目すべきで、寧ろかういふ人物に却つて人間味を發見するやうな氣がするが、これは後に述べる町人の心理狀態分析の際比較して見るべき要點となると思ふ。

かくの如く前の廣文の場合も、伊賀之介の場合も、境遇とめぐり合せ即ち運命とに基づく悲劇であるが、これを一層複雑に一層深刻にしたものは即ち『津國女夫池』の第三段目の切である。この作の結構については、既に近松の戯曲の形式を論じた場合に分解して述べて置いたが、文治兵衛が懺悔の動機をなすのは、文治兵衛の一子造酒之進（細川藤孝の近習）と義輝の室の侍女清瀧と相契つてゐたが、二人して福島文治兵衛の閑居へ御臺の御供をして來た時、文治兵衛夫婦の話によつて不思議や兄妹たることを知り、造酒之進は煩悶懊惱の極、附近の池に投身しようとする。之を追跡した文治兵衛が、初めて驚くべき舊惡を懺悔する。その要領をいへば、造酒之進は彼の舊友大内義隆の臣駒形一學といふ武士の子、母は造酒之進を生み落した七夜の内に死し、その後添に呼んだのが文治兵衛の妻、然るに、一學は程なく暗殺された。それで文治兵衛は當時未だ二十にもならぬその未亡人と嬰兒とを引取り、友人の義として造酒之進が十五になつたら親の敵を討たせようとの約束で國を立退き、浪人中に清瀧を儲けたが貧の爲にこの子は捨て、義理ある造酒之進を育て、後、造酒之進は藤孝の寵を受け次第に立身した。その立身を見るに引かれて敵を討たせることが延びた今こそ討たせよう、その敵といふのは外でもないこの文治兵衛である、といふわけは、一學を暗殺したのは實は文治兵衛で、その動機は、

戀人を一學に取られたその遺恨からであるといふ。その後、

一學が先妻産後に死し、忌の中より呼取り婚禮、無念にも妬ましく堪忍ならず手もなく討つて思ひのまゝに夫婦とはなりたれど、思へば劍と劍を抱合せたる女夫合……。

戀と義理とに悩まされつつ二十二年の光陰を過したのだと語つたのを聞いて、一同愕然として殆んど失神しようとする。そして文治兵衛は造酒之進がどうしても討つことが出来ないのもどかしがり、池へ身を投げる。その妻も亦後を追ふといふ筋である。序にいふが、この作に出てゐる兄妹相犯すといふ趣向は默阿彌の『三人吉三』の「おとせ十三」を聯想させる宿命悲劇であるが、この時に初まつたものではなく、元祿元年都萬太夫座上場、近松作の『今源氏六十帖』にその趣向が見えて居る。それがここに轉用せられたので、親の罪惡の結果子が畜生道に陥るのである。而してこの兄妹相犯の趣向は、後に『讃州屏風浦』(安永七年、若竹笛射等作)にも用ゐられて居る。默阿彌の作は流れをここに汲んだものであらう。又、冷泉文治兵衛の告白は前の伊賀介の告白に似た點もあるが、それよりは寶永四年京龜屋座所演の『けいせい石山寺』の樋口勘助懺悔の條を粉本としたもののやうに思はれる。

扱この『女夫池』の懺悔の場を見るに、近松の時代物中この中へ出る文治兵衛ほど、未練ら

しい破廉恥の人物は外には類例がないやうである。一死以て君の急を救ふ献身的武士から見れば、殆んど犬畜生にも劣つた者である。他人にいはれずとも文治兵衛自身が懺悔の場合に「浮世の泥に酔うたる文治兵衛は四足に劣つた」者と自らを罵つてゐる。併し彼は妻に對する愛と、義理ある子の立身を見る嬉しさに引かれて、即ち本能に引ずられ人情に囚へられて、心ならずも二十二年「劍と劍を抱合せ」たやうな、そして始の戀に百倍した苦しみを胸に包んで暮したのである。茲に我々は始めて、前の身代りの條に義理の爲に人情を無視したと不滿を感じたその義理と人情との纏綿せる生きた人間に接することが出来たやうな氣がする。斯くの如く近松の圓熟時代の中には、單に義理の權化そのまゝの武士のみでなく、廣文のやうな、伊賀之介のやうな、更に進んでこの文治兵衛のやうな人物をも武士階級の一人として描いて居るのを見るのである。吾々はこの事實に對して、我が大劇詩人は晩年に至るに及んで、かかる人物をも許容する程に、その人格が博大に、寛容に、そして更に一層人生に徹したものと見なければならぬ。即ち一層進歩したと解釋せねばならぬと思ふ。吾等が近松の作品を年代的に研究して、その藝術家として老衰を知らなかつたのに驚嘆し、敬慕する所以の一原因は實にここにある。

茲まで論じて來た上で、我等は時代物から眼を轉じて世話物に移らうと思ふ。人によつては

近松の時代物と世話物とは全く別なもので、その藝術的價值は日を同じうして論ずることは出來ないといつて、一概に時代物を葬り去るが、私は世話物の價值は時代物を待つて始めて顯れるものと信じて居る。少くとも一通り時代物を咀嚼した上で世話物を見なければ、本當の作者の心は解し得まいと思ふ。言ふ迄もなく時代物と世話物とはその形式に於て、その題材に於て頗る相違して居るが、その人物の本質を檢し、その盛られたる思想を分析して見る段になれば、この兩者は本質上の相違ではなくして、ただ名目と環境とによる相違に過ぎないといはざるを得ないやうな場合が多く、自然、内容的・本質的に見た場合には時代物と世話物とは全然別であるとはいへなくなる。或意味に於て時代物の延長、或は擴充が世話物であると言ひ度いやうに思はれる。

心中物の男主人公 先づ此の主張を明かにする爲に、近松の世話物中でも、時代物とは最も質を異にするやうに見える心中物の中に描かれてゐる男主人公の性格について、一通り考察して見なければならぬ。既に前にも述べたやうに、思ふに實際心中するやうな人物は、色と酒とに身を持ちくづした放蕩者や、無賴漢や、又は刑事上の罪人ともなるべきやうな輩がどうすることも出來なくなつた結果か、乃至は金に窮した擧句、一時の出來心で心中したものが多かつ

たらうと思はれる。然るに近松の作を通して見る彼等は、決してそんな醜惡のものではない。只それだけの原因で心中する者はなく、必ず何等かの道義的の理由が伴つてゐる。

先づ彼の『天の網島』の治兵衛を見るに、彼は感情本位のお人好しの、女に引廻されるやうな男であるが、その一面には町人として面目を重んずる意氣地があり、男子としての覺悟を心得て居た。若しこの本性がなかつたならば、彼は恐らくは心中といふ思ひ切つた舉動に出でずに、女房は男に取返され、小春は見殺しにしつゝも、みじめな生を續けたであらう。

次に治兵衛と同型の『曾根崎心中』の徳兵衛を見るに、彼は治兵衛よりはもつと男の面目を尊重して居る。お初と深く言ひかはした彼は、主人が強制的にその女房の姪を結婚させようとする、と、「銀をつけて申し受け、一生女房の機嫌とり、此の徳兵衛が立つものか、いやといふからは死んだ親父が生きかへり申すとあつてもいやで御座る」と男の我を立て抜いて居る意氣を見よ。又、油屋の九平次に命代りの金を借すにも「男づくで貸した」のだが、却つて彼の奸計にかかつて了ふ。「平野屋の徳兵衛ぢや合點か、己れがやうに友達を騙つて倒す男ぢやない」といつて腕づくでも取返さうと争ふが、多勢に無勢で散々の目に逢ひ、「男も立たず、身も立たず」といふ羽目に陥るので、「此の徳兵衛が心の底の清しさは三日を過ぎず大阪へ申譯して見せ

う」と既にこの時死を覺悟して了ふ。輕率に命を取扱ふといへばさうも思はれるが、併し彼に取つては戀と男の面目とより外には人生は無かつたのである。

その外『心中二枚繪草紙』の市郎右衛門が義弟善二郎の報恩講金横領の罪を我が身に引受けて、せめては養父への御恩返し的一端にしようと決心して死ぬといふ健氣な動機はいふ迄もなく、『今宮の心中』の二郎兵衛でも、『生玉心中』の嘉平次でも、皆それぞれ男子の意地を重んじて居る。『心中宵庚申』の半兵衛に至つては、流石に武家の出だけあつて、舅平右衛門から「娘は氣に入らずとも我を不便と面倒見て必ず去つて給はるな」と折入つて頼まれ「ヲ、去るまい去るまい……」、「元は遠州濱松にて山脇三右衛門が倅、武士冥利、商賣冥利、ちよは去らぬ氣遣するな」といふ番へた一言を飽くまで守つて、しかも養ひ親の惡名を世に立てまいといふ立派な動機に基づいて居る。

以上の例によつて見るに、武家の出である半兵衛はいふ迄もないが、其の他の徳兵衛以下の生粹の町人で、しかも元祿の太平の酒と肉とに陶醉して居るやうな人物でも、その半面には必ず町人の體面、男の意地、男づくといふ精神が程度の差こそあれ必ず耿々として光つて居る。この男の意地、男づくといふ精神が表れて、ここに任俠、男達となるのである。心中物が禁じ

られ、世話物が衰へた時になつて、男達物が行はれる元はここにある。而してこの精神は即ち武士が體面を重んじ、道義を尊重し、それが爲には命を惜まないといふ精神と、その根柢に於ては同一であることは説明するまでもないと思ふ。即ち武士道精神が町人化して、ここに町人の面目尊重、男の一分となつて表れたものである。この精神が時には身代りに立ち、又、時には割腹して義の爲に殉じたのとその根本精神は同一であつた。

町人道に對する近松の理想　思ふに情死をするやうな男は、いふ迄もなく缺陷の多い人物であらう。思慮分別の足らぬ點もある、感情生活に溺れ易い、氣分本位の生活をだらしく續けたものでもあらうが、彼等をして情死といふやうな思ひ切つたことをさせるのは、單に行き詰つて仕方がないからといふのみでなく、男の面目、男の一分を尊重するといふ精神があるからだといふ風に作られて居る。即ち、近松の心中物に於ては、男の意氣地、男の面目が、彼等を馳つて心中させるやうになつたものであると思ふ。時代物の武士道の犠牲的精神の町人化といふことを見通しては、近松の心中物にはその動機がどうしても解けないと思はれる作がある。この男の意氣、男の面目を重んじるといふ精神は、實に我が國民性の一特色であると思ふが、近松は實に人生の理想を前に置いた作者であつた。而してそれが時代物を通して武士社會に現れ

ては彼道德となり、世話物を通して町人社會に現れては町人の體面、男の一分となつて表れたのである、とかう私は見るのである。自然、心中物の中の人物もすべて近松の息がかかつて居る、即ち近松の作によつて生かされて居る人物である。

世話物の女性 更に進んで世話物の中の女性について見ても、既に前の戀愛的身代りの條に述べたやうな犠牲的の女性はいふ迄もなく、『今宮の心中』の中に活動するおきさのやうな強い健氣な女を始めとして、『天の網島』の小春でも、『冥途の飛脚』の梅川でも、『心中刃は氷の朔日』の小かんでも、『曾根崎心中』のおはつでも、それぞれ性格に多少の相違はあるが、張りと思氣地を生命とし、『金ぜきで親方から遣るならば、物の見事に死んで見しよ』といひ、又、引かれぬ義理合ひには身にも命にも代へぬ大事の男をも思ひ切るといふ、その意地と義理との前には命を捨ててかかるといふ精神は、由良之助の母や、妻や、又は錦祥女のやうな武家の立派な女と、その本質に於て一脈相通するものがあり、彼等を武家の妻女の位置に置いたら、矢張り立派に節義の爲に身を殺す女性となつたであらう。ここにも我々は近松の理想の女性が顔を出して居るのを見るであらう。加之、彼の『鐘の權三』では、權三との駆落の場合に於てさへも「不義者に成極めて、市之進殿に討たれて、男の一分立てゝ下され」といつて、首尾よく市之

進に討たれるを願ふが爲に駈落させるおさむにも、矢張り道義の念、犠牲的精神を働かせて居る。かうして醜惡なるおさむの本能的の情慾を美化させてゐるのは、矢張り作者の虚實皮膜の藝術觀に基づく理想主義の發現に外ならない。

世話物の老人氣質　また之を世話物の中に現れる老人氣質の人物について見るに、彼の『冥途の飛脚』の孫右衛門や、『大經師昔曆』の道順や、『生玉心中』の一つ家の五兵衛や、『壽の門松』の山崎淨閑や、『博多小女郎浪枕』の小町屋惣左衛門や、『油地獄』のお澤などを見るに、いづれも表面は實に頑固一徹、義理一點張りの無情冷酷の老人のやうであるが、「やれ慈悲知らぬ親の酒を見よ、實の慈悲の味を飲みて知れ」と瓢箪から一步金を注いでくれるといふ情深い親の慈悲を心の底に湛へて居る慈父である。我々はかういふ型の人物に出合ふ度毎に、時代物の中に出て来る常盤母子を見遁す『源氏烏帽子折』の宗清型の人物を聯想し、殊に心強くも勘當した我が子に、寝た振りをして太刀を盗ませ、「干將莫耶が劍でも我が子に何か惜しからん」と最後に本心を告白する、府内秀景の父府内太夫を思ひ起さざるを得ない。即ち此等の人物は只武士と町人といふ境遇の相違によつて、その言語舉動にこそ相違はあるが、その本質は全く同じであつて、いづれも老詩人の心に描かれた義理堅い慈父の復現でないものはない。

・更に轉じて『淀鯉』の中に出る忠僕新七の言動を見よ。町人生活に於ける作者の理想とする手代の如何なる者であつたか、また町人生活の主従の關係は如何にあるべきかは遺憾なく描かれて居るではないか。『油地獄』中の徳兵衛の如きも亦その類型といふべきである。

斯く見來れば、近松の時代物と世話物とはその中へ表れる人物の性格は、その兩者を通して本質的には類型であるものが多いが、その境遇は一方は形式を重んじ、道義一點張りで禁慾的生活を強制されて居る武士社會であり、他は信用を重んじ、金錢を貴ぶと同時に、その得たる金錢で色と酒とを買ふといふ階級であるから、その結果として、彼等の犠牲的精神が發現する場合に、前者は節義の爲に殉ずる事となり、後者は人情(戀)の爲に殉ずる事となるのである。而もこの場合に前者は節義の爲に人情を抑壓して居る不自然の傾があるが、之に反して後者は節義を動機の一として人情に殉ずる場合が多いといふ差がある。ここが即ち時代物に對して世話物が藝術として一段の恒久性・普遍性を有する所以であると思ふ。

時代世話物を貫く思想と節義の念 以上近松の作を元祿時代を背景として、先づその時代物の中に盛られて居る思想の主なるものを考察しつつ、次第に歩を進めて遂に世話物にまで及んだのであるが、之を要するに、近松の作は之を道義的方面から見ると、その作品は世相の寫實に止

まらずして、その中に表れる人物は作者によつて理想化されたものであり、その中に盛られて居る想も亦作者の理想が表現されて居るが、彼は人生に於ける節義の念を極めて尊重して居ることは明かである。而してこの節義の爲に殉ずるを以て、人生としては最高善であると觀て居る。殊に武士階級に於ては、この精神が武士の眞髓であると信じて居たやうであるが、また之に對して一方に於ては、人情を尊しとした。親の子に對する慈愛は殊に尊いものとして描かれ、親心の表現は實に涙ぐまれるまでよく出て居る。また子の親を思ふ情も決して輕視はして居ないが、不思議にもこの點に於ては前者程の生彩がない。而して人情の中、殊に力を注いだものは何といつても戀愛である。ここに至つて我々は四角張つた道義的作者としての近松から眼を轉じて、彼の作に盛られた戀愛について一瞥を與へねばならぬ。

近松の作に取扱はれた戀愛 近松の作に取扱はれた戀愛に色々の場合と色々の形式とがあるが、いづれも滿されざる戀愛である。換言すれば戀愛と他の條件との葛藤を材題として居るものが多い。即ち戀愛は悲劇的なるが多い。

その中でも前期の作と後期の作との間には扱方に相違があり、殊に時代物と世話物とによつて頗る相違はあるが、時代物の中に描かれた戀愛には「戀に上下の差別はない」といふ概念即

ち戀愛は人間の階級的制度、差別の觀念、道義の埒を超えたものであるとの想、これは即ち作者の戀愛觀の根柢をなすものであるが、この觀念の表現されたものが多く、王侯貴族も戀の爲には位置を擲ち名利を捨てて流離の苦を嘗めるといふ筋のことが多い。又この戀愛の三角關係と政治上の重大事件との取合せられて居るものが多いし、又、戀愛を道義・貞操の犠牲とする場合も少くないが、要するに概念的であり、類型的で、中世の物語風であつて、元祿時代の實人生の戀愛を描いてゐると思はれる程のものは尠い。ただ歴史的に見て稍々注目すべきは、その初期の作に描かれてゐる失戀に伴ふ嫉妬・怨恨の執念を取扱つたものである。

執念物 この想は夙に謠曲の執念物（葵の上、鐵輪、道成寺等）にも取扱はれて居り、また我が國の中世に於て行はれた「うはなり打」といふ現象（京傳の『骨董集』の上篇の下を見よ）によつても知れる通り、随分古いものであるが、之を近世の戯曲に取入れたのは近松である。即ち彼の處女作『花山院后諍』の藤壺の怨靈は、怨恨・嫉妬の執念を材題としたもので「うはなり物」の原作である。この作は後年に近松の手によつて改作されたものがあるのみでなく、海音の『花山院都巽』は、近松の原作に『櫻姫』を取合せたに過ぎないし、更に江戸に於ては、貞享四年に『さざさあらそひ』の外題でこの作が出版され、虎屋喜元の『藤壺弘徽殿』（寶永増補
『松の落葉』）

となり、また土佐節の『源氏花鳥大全』の原據ともなり、一方歌舞伎に於ては、夙に市川家十八番の一となつた元祿十二年・中村座の『一心五界玉』の第三番目の瓢の場合を生み、尙又、近世の江戸長唄の『瓢染分紅葉』(明和六年七月市村座 富士田吉治)から『花雲鐘入月』(天保八年三月市村座)等の近代のうはなり物にまで系統を引いてゐるのである。又この女の執念と支那の反魂香の想と相結合して、茲に有名な浅間物が生れるのである。蓋しその原作たる元祿十一年の『傾城浅間嶽』(京、山下半左衛門座、中村七三郎)はよし近松の作でないとしても、少くとも浅間の煙の趣向は近松のこの女の執念を取扱つた作に負ふものたるは明かで、當時傑作として推稱せられて以來、永く江戸の劇壇に於て所作事物としての一大系統を形作り、道成寺物と相對して女の戀の執念を舞踊的に取扱つた二大典型をなすのであるが、其の源は實に近松の處女作に基づくといつてよいと思ふ。其の他近松の作には、『葵の上』や、『蟬丸』や、『西王母』や、『つれづれ草』などにも随分執拗なる戀が取扱はれて居る。而してかういふ中世趣味の、そして我々を戰慄させるやうな所謂三角關係の戀愛を題材としたものは、彼の後期の作には殆んど跡を絶つて了つた。尤もその最後の作たる『關八州繫馬』に、胡蝶の戀を取扱つたのは頗る異例で、これは謠曲の『土蜘蛛』に基づくが、後世の所作事物に影響を及ぼすのである。失戀の執念に就いて更に注意すべきものは僧侶の失

戀を取扱つたものである。

僧侶の戀の執念　その最初の作と思はれるのは實に延寶八年(近松が廿八歳の時)正月刊行の宇治加賀掾の

正本『赤染衛門榮花物語』である。赤染衛門が上東門院の命を受けて宇治の平等院に榮花物語を執筆中、その寺内の若僧大信に戀慕されたが、衛門の情人大江雅衡は大信を欺いて溺死させた。然るに、榮花物語を献上の日に大信の怨念が衛門と同じ姿となつて現れて人々を困惑させるといふ筋である。形式としては謠曲の『二人靜』などを連想させるが、僧侶の失戀を動機とする怨念の出現は頗る興味ある事柄で、その當時の坊主の社會の墮落を描破したものであつたかも知れない。歌祭文にも『はえや心中』などいふ坊主の心中を歌つたものもある程で、勿論當時の坊主には破戒無慚の徒も多かつたであらうが、この作などを讀んで見れば、僧侶の破戒といふことのみでなく、人間の本能の強烈さがよく出て居るやうに思はれる。元祿十二年江戸の山村座の『一心女雷神』の中の頼豪が絶間姫を執念深く思ひ込む趣向などは、この作の影響を受けて居るものと思ふ。その他近松自身の作でも『一心二河白道』の清水の清玄なども即ち大信の翻案であつて、清玄の櫻姫を思ふ一念が琵琶彈座頭となつて櫻姫を苦しめるといふ趣向と、前の胡蝶の怨念が蜘蛛の精に乘移り、命婦となつて頼信の御臺を苦しめる趣向とをつき合

せたものが、後の常磐津の有名な『蜘蛛絲あづさのゆみはり 梓あづさ 弦ゆみはり』(明和二年十一月、市村座、金井三笑)となるのである。また彼の近松の作と推定される、『源氏供養』(延寶四年)の改作である『石山寺開帳』(加賀掾の正本)の第三段目に傾城奥州と妹女郎翠浦とが同じ姿で現れて、衛門佐信高に恨みをいひ、二人で信高の奪ひ合ひをする趣向や、『傾城佛の原』(元祿十二年、萬太夫座)の第一段の終の文藏に對して竹姫と奥州との嫉妬の念がもつれ合ふ趣向なども、皆、大信が衛門と同じ姿となつて現れるといふ型の翻案であつて、前の淺間物と密接の關係を有してゐる。而してこの對の姿の人物が表れるといふ形式に僧侶の執念、殊に清玄の系統の内容を盛つたものが即ち後世の『二人淺間』及び『兩面』(ふたおもて)、『慈賣』(しのぶり)となつて、長く江戸劇壇の所作事物の一大系統をなす原據となるのである。この點から見れば、『后諍』と『榮花物語』は淨瑠璃史上非常に注目すべき作であるといはなければならぬ。

世話物の戀

次には主として世話物に扱はれた戀について一言して置き度いと思ふが、之を説明の便宜上、夫婦間の愛、未婚の女の戀、遊女の戀の三種に分けて見ようと思ふ。

夫婦の愛

先づ第一の夫婦間の愛について見るに、これは頗る窮屈なものであつた。近松時代には、一般の家庭に於てはいふ迄もなく在來の傳統を重んじて、人間本位・個人本位ではなくして、家が本位であつた。それが爲に一家の間に於ては、夫婦の間よりも親子の間を重んじ

なければならなかつた。自然「嫁」は夫の自由選擇ではなくて舅姑が貰つてやるのである。それ故、忠實な嫁たるの第一の資格は舅姑によく仕へなければならぬ。舅姑の氣に入らなければ「姑離縁」に逢ふといふ境遇に置かれた。従つて夫に對する愛と、舅姑に仕へる孝養とが一致



宵 庚 申 初 丁

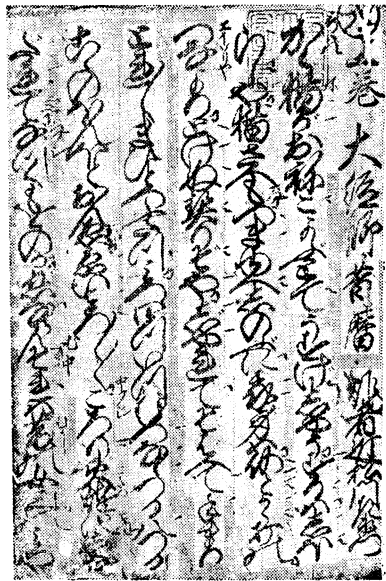
する場合は問題が起らないが、其處に衝突がある場合にはどちらかを犠牲にしなければならぬ。その場合に飽くまで夫婦の愛に生きようとすれば、ここに生存を否定しなければならぬ。これが即ち、女夫心中といふ悲劇の起る根本原因で、それに色々の條件が加はる。即ち男が氣の弱い聶養子であるとか、義理堅い氣質であるとか、姑が

奸惡な人物であるとかいふ類の事である。近松の作に描かれたおかめ與兵衛の『卯月の紅葉』、『卯月の潤色』及びお千代半兵衛の『心中宵庚申』が即ちこれで、この場合に彼等は戀愛の前に一切を焼き盡すだけの熱がなければ出來ないが、近松の作のおかめの如きは正にさうであり、

お千代も全く戀に生きた女であつた。その言葉の中に、「半九郎お染が臺詞身にこたへ、二人死ぬなら死に度いが、こな様死んで下さるか」と云つて居り、白無垢を仕立てて用意する程の女である。

而して家庭に於て舅姑との關係が無い場合に、主婦として飽く迄家に殉じ、貞女の道を守つて放蕩な夫に愛を捧げて行く時は、『重井筒』のお辰や、『天の網島』のおさんのやうな型の女となる。犠牲的精神を尊重し、傳統を重んじた圓滿なる近松に取つては、かういふ女性は實に理想的の女性として描かれたものかと思ふが、現今の個性に目ざめた者の目から見れば、如何にも氣の毒な時代の犠牲となつた人と思はれる。更に意志が強固で理智の眼が明かに、そして個性に徹して居たならば、或は家庭の破滅を救ひ得たらうにとさへ思ふ程である。併し乍らかういふ女性は、近松の作の世に残る限りは、讀者に向つて溫かなる愛の光を投げってくれる人間であるには相違ない。女の身の言ひ甲斐なさといふ言葉は、平安朝以來の我が封建時代の一傳統であつた。

同じ家庭の主婦として、お辰やおさんと全く反對の人物は、例の三姦通曲の主人公となつた、お種とおさんとおさゐとである。この三人は、その天性に於ていづれも頗るアブノーマルで、



丁初「曆昔師經大」

淫蕩的傾向を有つて居り、しかも共に家庭生活上の苦しみはない。そしてお種とおさゝに空閨の寂寞といふ條件、おさんは嫉妬といふ條件の下にいづれも不倫の事を仕出かすのであるが、度々いふ通り近松はその藝術觀と穩健な性格とから、この三人の所行に相當な理由をつけて居る。誤つて大事を犯して、「此の上は身をすて命かぎり」に名を立て、茂右衛門と死出の旅路の道づれ」と金子五百兩を盗んで駈落をし、堅田の浦に入水したと見せて丹波越をした西鶴のおさんのやうなふてぶてしい徹底的な處はない。併し近松の姦通曲を見れば、元祿時代の女は無理解の結婚をした上に、傳統的の制度の缺陷があり、且又、本能を抑制すべき意志と理智との訓練が無かつた爲に、かういふ悲劇を起したといふ事をば十分に考へさせられると思ふ。更にまた作者の立場になつて見れば、この場合、本能の力・情慾の衝動は到底之を抑制し得ないもので、これが爲に世間には悲劇が起るといふことを示して居

るものとの解釋も下し得られるやうに思ふ。

未婚の女の戀 第二に未婚の女の戀について見るに、西鶴の『五人女』や『一代女』に描かれた女性やその他當代の世相を歌つた歌謠などを材料として見ても、一方に於て女を固く家庭内に封じ込めて居るといふ因襲に對する、性慾的本能の反對は、非常に強烈に表れて居ることがよく見えて居るが、近松の作に於てもこの點に於ては殆んど同様、否なもつと熱烈に、もつと本然的に描き出されて居る場合が少くない。堅實な清十郎を挑んで、それが發見された時、

騒がす袖にて隠し、これ源十郎、其方も男ぢや引かけはせぬ、忍んで逢ふは清十郎、見通しにしてたもらうか、沙汰するならするといや、幸ひ刃物もこゝにある、直ぐに二人が死ぬる迄、サア助けてたもるか殺しやるか

と居直る度胸を見よ、これでこそ「親より子より我が身より、いとし殿御のいとしばや」と歌ふ戀の狂女となるも尤と思はれ、かういふ熱烈な態度の前には、どんな理智も因襲も義理も、何の價值もない程の戀の白熱を覺えるであらう。その他『薩摩歌』のおまんでも『心中萬年草』のお梅でも、『今宮の心中』のおきさでも皆このお夏と同型であつて、思ふ男の爲ならばどんな犠牲でも拂ひどんな大膽な事でもし、どんな苦患も厭はないといふ熱情が生き生きと描き出さ

れて居る。これは實に元祿の若い女性の反映であると共に、近松の戀愛觀を知る上に於ては見通すべからざる重大なる性格の人物である。

遊女の戀

扱て戀愛に關しては、以上舉げ來つた主婦や、よめや、未婚の娘に比較して見れば、遊女の境涯は全く別天地である。彼等は憂き川竹の身であつた。世間の地女が身も魂も奪はれた様な異性は、大抵の場合に於ては彼等の爲には、精神も肉體も共に蹂躪される肉體であつたであらう。併し彼等と雖も本能の力はどうな事があつても之を磨滅し去られない。否な彼等の環境はこれを刺戟し助成する場合が多く、また世間を知らぬ地女の如く單純ではない。従つて異性に對する衝動は、更に微妙に更に複雑に動く。そして彼等には異性に對する選擇の自由は、その境遇上の特權として與へられてゐる。かういふ狀態に於ける彼等が選び出した異性に對する熱情の熾烈なるは當然であるのみならず、彼等には一種の洗鍊された嬌がある、意氣地がある、見えがある。身體は賣つて心は許さない、心は只一人に捧げるといふ念は強烈である。かくてその心まで捧げた一人の爲に、彼等はその戀を満足させようとすれば「外のお客は嵐の木の葉でばら／＼」と振り散らし、勤の妨げとなるので抱主にせかれる。その中に金づくで身請の相談が出て來る。彼等の境遇は之を拒むべき法律上の理由がない。然るに思ふ男は無

理をして金に窮して、男の一分も廢らうとする状態になる。かくて人生の岐路に立つ場合に、彼等は人情の爲に義理の關門を突破して、「逢ふに逢はれぬ其の時は、此の世ばかりの約束か……死出の山三途の川はせく人も、せかるゝ人もあるまい」と決心し、「若し金ぜきで親方から遣るならば物の見事に死んで見しよ」といふ氣になり、「思ふ男に添はせぬからは殺しや／＼」（お花『長町女腹切』、太郎右衛門にいふ）といつて全くの死に身になつてかかるといふことになる。かくて彼等は義理を棄てると共に、現世を見捨てねばならぬ事となり、手に手を取つて死出の道行をする。我が老詩人はこの現世に於て、義理の爲に人情の犠牲となつた男女の死出の道を飾るべく、その錦心繡腸を絞つて道行の名文を手向ける。これを義太夫の旋律に乗せて語る間に彼等は現世を見捨てて了ふのである。そしてその行く未來の世界は永劫に彼等の爲には祝福せられる戀愛至上の世界である。そこで貴賤群集の同向の種、未來成佛疑ひなき戀の手本をこの世に残して、彼等は靈の世界、自由の世界に隠れて了ふ。これが近松によつて描かれた心中物の大團圓である。そしてこれが博大なる愛に徹して、時代の缺陷と人間の本能の力とを十分に理解した結果、戀愛至上主義を容認した我が大劇詩人の人間愛の究竟の表現たる心中物の内容上の意義で、やがて彼の五十年に亘る作者生活の思想上の結論を示すものである。